

# Q技法による 聴覚障害意識の考察(Ⅱ)

高 柳 信 子

## A Study of Consciousness of the Auditory Disorders with a Method of Q-technique. (Ⅱ)

Nobuko Takayanagi

### Purpose:

The purpose of the present study was to clarify the self-perception of consciousness of the auditory disorders for two subjects by means of Q-sortings.

### Subjects:

Subjects were two female college students. One of them was the person with the hard of hearing (J), and the other was the person without disorder (Y).

### Method:

Materials used were self-descriptive statements about self-consciousness on auditory disorder. In order to obtain an objective indication of the self-perception with auditory disorder, the subject with the hard hearing was asked to Q-sort the sixty-four cards to represent herself, her ideal self, and her remembered self. The other subject without auditory disorder was also asked to sort them to represent her supposed self with a auditory disorder and her ideal self.

### Findings:

Subject (J) showed considerable discrepancy between the real self and the remembered self ( $r = -.202$ ). Her real self was congruent with the ideal self than with the remembered self. ( $r = .622$ ) It was found she felt herself acceptance and self actualizing.

In Subject Y, there was low-correlation between her supposed self and her ideal self (.38). She showed a higher correlation coefficient between her expected (ideal) self and the ideal self of Subject J than the supposed self (.52). In herself perception, she was able to permit in her awareness feeling with disorder and perceived overcoming disorder in helping relationship with her family.

ゲシタルトなのであるとする。

## 問題提起と目的

聴覚障害の中でも、聾の障害または障害者に関する研究は比較的に見受けられる割に、難聴者（児）に関わる研究は乏しい様に思われる。研究者が難聴を敬遠する理由としては、聾に比べるとそれほど目立つ明白な障害ではないし、母集団としての好都合な集団化がないことがあげられている。<sup>④</sup>

Heiderによれば、健康者は、視覚障害者の方が歴然と分り易いので同情しがちだが、聴覚障害者に対しては、先入観をもったり実力を過小評価したりするうえ、聴覚障害者自身のもつ先入観も、健康者との心理的距離を増大して不適応へ導いているという。<sup>③</sup>

特に難聴者に対しては、健聴者はつい自分達と同じ行動を期待し過ぎたり、難聴者も意識的にしろ無意識的にしろ、健聴者の無理な期待に沿う行動に出ることも多い。両者の相互理解を進めるために、まず前回の研究では、健聴者における聴覚障害者として仮想された自己と、聴覚障害者における現実の自己との2種の自己概念の照合を試み、Qテクニックによる因子分析を行なって、障害意識の因子構造を明らかにした。それによって健聴者が聴覚障害者の現実的自己知覚を共感的に理解することの困難さも知らされた。<sup>⑦</sup>

ここでは、前回の対象者に含まれた難聴者（J）と、健聴者（Y）各1名をとりあげ、Q分類によって把握される聴覚障害に関わる自己概念を、個別に理解することを目的とした。

ここでいう自己とは、Rogersの定義に基づくもので、経験の私的世界（現象的場といわれている）の中で知覚された、意識対象としての自己である。瞬間的には具体的実体をなしているものであるから、部分的には、構成概念、即ち自己概念によって操作的に説明可能と考える。自己概念とは、意識の上で気づく可能性のある自己の知覚の体制化された

## 事例

### 難聴者（J）

Jさんは、22才の女子大学生で、家族は両親、祖母および高校生の弟ひとりとの5人暮らしである。感音性難聴で6級の障害度を持ち、聴力損失は右が90db、左が55dbである。ゆっくりきいてあげたり話しかければ、補聴器なしでも意志の疎通は最少限可能であるが、小集団以上の会話では、補聴器なしでは対話が困難で、きき直しや話し方に歪みが見られることがある。

中学へ進学の際に、体が弱かったため養護学校をすすめられた。その折に医師に難聴と診断されたのが、初めて親が聴覚障害を知らされた時であった。養護学校を見学したが、学校らしくないと思い、嫌だと駄々をこねた事を記憶している。結果的には、高校まで一貫した普通の私立中学へ進学した。更に大学まで進み、特にカウンセリングに強い関心をもってその研究会の推進役となるなど、意欲的に学習した。高校の時は、自分の障害に対して自分がどう動いてよいのか分らずに、八つ当たりしていた自分があつたし、周囲の人からはその様な自分のありのままの感情を理解して貰えず、対処の仕方については、ただ頑張れよ、といわれるのみで、解決の糸口は与えられないことなく、いら立ち迷うだけだったと述懐している。それを覚えてくれたのは、大学生活の中であつたとの実感も強くもっている。それは、聴覚障害とは無関係に、お互いの問題を率直に指摘し、時には認め合えるバランスのとれた対人関係に価値があつたという実感であつた。いろいろな見方があつたことも知ることができた。互いに深く傷つく経験もしたが、それだけ徹底しなければ、今日の自分はなかつたことを自認している。

### 健聴者（Y）

Yさんは、大学3年の女子で、現在に至るまで、聴覚障害の経験はなく、Jさんとは意識のない人である。

## 方 法

素材として用意されたものは、障害の受容、心理的成長、生きざまなど、聴覚障害に対する自己意識について1項目ずつ記載された64枚のカード及びそのカードを分類する1枚のシートである。これらのQ項目は、前回の報告で用いられたもので、構造化されていないものである。<sup>⑧</sup>

分類法は、「自分に最もぴったりする」極から、「どちらともいえない、分らない」の中間段階を経て、「最もぴったりしない」反対の極に至る11段階のいずれかにカードを分配してもらう強制的Q分類法であり、正規分布に似た頻数分布になる様に指定されている。各段階のカード数は、左から順に1、3、5、7、10、12、10、7、5、3、1となっている。強制分布については、異論がない訳ではないが、強制されない分布との相関が高いという報告もある。<sup>①</sup> Strongらも、どちらかといえば、自由分布よりもすぐれていると述べている。<sup>⑥</sup> Q分類法は、内観的自己報告に類似するが、自由記述ではないので客観的に操作と尺度をもち得る。

分類課題は、難聴者(J)の場合は、①自己の障害に対する現在の自分の気持について(現実的自己分類) ②こうありたいと望む自分の気持について(理想的自己分類)、③過去にこうであったと思われる自分の気持について(過去の自己分類)の3種類で、3回に分けて与えられた。

ここで把握される自己概念は、時間の継列を示すものではなく、「現実の知覚された自己」に立脚した「想起された過去の自己として知覚された自己」と「望ましい自己としてあるべき自己」であり、現実の自己は、過去および理想の自己概念との対比において一層明確化されることになる。

また、健聴者(Y)に対しては、①自分が聴覚障害者であると仮定した場合の自分の気

持について(仮想的自己分類) ②聴覚障害者にこうあって欲しいと望む自分の気持について(期待的自己分類)即ち、健聴者から見た障害者としての理想的自己分類ともいえるもの、の3種類である。

Q分類は、自らの判断に委ねられるところにデータとしての価値があり、自己概念を体制化または再体制化する過程そのものともいえる。また、他人にとっては、相手の内的枠組によって理解するひとつの手段となり得る。

## 結 果 (難聴者・J)

### 1. 現実的自己

Jさんにとって、ぴったりする及びぴったりしないと知覚された現実の自己として選ばれた最も代表的な項目は、次のとおりであった。各項目の冒頭の( )内数字は、Q得点を示し、Q分類において、現実の自己に最もぴったりする項目を11点として、選択された順に7点から11点まで、ぴったりする段階に応じて高い得点が与えられている。項目末尾の数字は、項目の番号を示すものである。

一方、ぴったりしない項目として選択された場合の( )内のQ得点は、最もぴったりしない段階の項目に対して1点が与えられ、1点から5点まで、点が高くなる程、ぴったりしない度合は弱められることを表わす。

以下、各種の分類毎に示された代表的な項目について結果を記しておく。

#### ぴったりする項目

- (11) 私は自分の障害を通して自分自身と戦うことを知った<sup>⑩</sup>
- (10) 私は自分が障害をもっているかいないかは、どうでもよいことにしか思われない<sup>⑦</sup>
- (10) 私が障害者であることは、ひとつの現実である<sup>⑪</sup>
- (10) 私は自分の今の状態に安心していられる<sup>⑥</sup>
- (9) 私は健聴者のわれわれに対するとまどいの気持を分ってあげようと思う<sup>⑬</sup>
- (9) 私は障害をもっている自分自身を見放す

- ことはできない<sup>17</sup>
- (9) 私は自分の障害について割り切っている<sup>25</sup>
- (9) 私は自分の障害を通して人の心がよく分るようになった<sup>45</sup>
- (9) 私は障害者である前に、ひとりの人間であることを感じている<sup>60</sup>

#### びったりしない項目

- (1) 私は自分が障害者であることがはずかしい<sup>10</sup>
- (2) 私は耳に障害があることでショックを受けている<sup>3</sup>
- (2) 社会は私のために何をしてくれるのかと思う<sup>44</sup>
- (2) 聞えないのなら死んだ方がましだと時々思う<sup>58</sup>
- (3) 私は他人の同情や憐れみに腹が立つ<sup>22</sup>
- (3) 私は健聴者が羨ましい<sup>23</sup>
- (3) 私は自分の耳のことであまり苦しんではいなかった方だ<sup>51</sup>
- (3) 私は自分の障害との戦いに疲れてしまった<sup>53</sup>
- (3) 私の耳の障害はいつも私を悩ませる<sup>61</sup>

Jさんの現実的自己は、障害そのものに対してよりも、障害をもつ自己自身と戦う自己であり、障害者としての自己を承認し、情緒的に安定した、成長する自己として概念化されている。びったりしない項目からも、障害者としての自己を肯定し、社会に依存せず自立した自己構造をもつことが認められる。

## 2. 理想的自己

#### びったりする項目

- (11) 私は障害を通してすべての人々を愛することを知った<sup>59</sup>
- (10) 私は自分の障害を通して人の心がよく分るようになった<sup>45</sup>
- (10) 私がこのような形で存在させられていることに満足している<sup>52</sup>
- (10) 私は障害を通して、人の心はすべて尊厳に満ちていると感じている<sup>55</sup>
- (9) 私は健聴者のわれわれに対するとまどいの気持ちを分ってあげようと思う<sup>13</sup>

- (9) 私は自分の障害に感謝している<sup>18</sup>
- (9) 私は自己の障害の中から得たものの大きいことを感じている<sup>24</sup>
- (9) 私は障害ある中で、自己の存在に幸せを感じている<sup>55</sup>
- (9) 私は障害そのものが私に生きがいを与えてくれたのを感じている<sup>41</sup>

#### びったりしない項目

- (1) 私の耳の障害はいつも私を悩ませる<sup>61</sup>
- (2) 私は自分が障害者であることがはずかしい<sup>10</sup>
- (2) 私はなぜ自分がこんな障害を背負わなければならないのか分らない<sup>30</sup>
- (2) 私は自分の障害によって自分が身動きできないのを感じている<sup>49</sup>
- (3) 私は自分が障害者であることが嫌だ<sup>4</sup>
- (3) 私は障害者であることが信じられない<sup>14</sup>
- (3) 社会は私のために何をしてくれるのかと思う<sup>44</sup>
- (3) 私は自分の耳のことであまり苦しんではいなかった方だ<sup>51</sup>
- (3) 聞えないのなら死んだ方がましだと時々思う<sup>58</sup>

望ましい自己として選択された項目からは、障害を受容して広く他人への愛と共感的理解を志向し、障害を超越して、満足と自由、幸福・感謝、生きがいに充ちた自己構造が示される。

## 3. 過去の自己

#### びったりする項目

- (11) 私は健聴者が羨ましい<sup>23</sup>
- (10) 私は障害のせいで人間関係がごちないのを感じず<sup>5</sup>
- (10) 私の障害ある故の苦しみは、誰にも分ってもらえないと思う<sup>19</sup>
- (10) 私は聞えないことが苦しい<sup>63</sup>
- (9) 私は障害を克服しようと努力している<sup>6</sup>
- (9) 私はなぜ自分がこんな障害を背負わなければならないのか分らない<sup>30</sup>
- (9) 私は聞えない自分が情ない<sup>32</sup>
- (9) 聞えにくいことは私をみじめにさせる<sup>33</sup>

- (9) 私は耳のきこえにくい自分に不安を感じる  
⑩

ぴったりしない項目

- (1) 私は自分の障害に感謝している⑬  
 (2) 私は障害ある中で、自分の存在に幸せを感じている⑮  
 (2) 私は障害そのものが私に生きがいを与えてくれたのを感じている⑭  
 (2) 私は自分の耳のことであまり苦しんではいなかった方だ⑯  
 (3) 私は自分が障害者であることがはずかしい⑩  
 (3) 私は“自分の障害故に……”といったこだわりの気持をもったことがない⑳  
 (3) 私は耳のきこえにくいことを深刻に感じたことはない㉑  
 (3) 私は自分の障害を自らよこんで背負いたい㉒  
 (3) 私がこのような形で存在させられていることに満足している㉓

現実の自己から想起される過去の自己は、障害を拒否し、他人をも受容れることができず、障害をもった自己に不安を感じて、障害にこだわっているみじめな苦悩する自己として知覚されている。

現実—理想—過去の自己分類の関係

これら3種の分類について、Pearsonの相関係数を算出したところ、第1表の如き結果を得た。現実的自己は理想的自己との間では、かなりの相関が見られた(.622)のに比べ、現実的自己から想起された過去の自己との関係では有意な相関は認められなかった(-.202)。Jさんの現実的自己は、理想的自己に向って高く価値づけられて知覚され、反対に過去の自己は、現実の自己からは分裂の方向に想起されて知覚されていることが分る。また、過去の自己は理想的自己とも負の相関が認められ、矛盾した傾向をもっている。

第2表は、各分類において、代表される項目の中で一致して選択された項目番号を示すものである。Jさんにとっては、健聴者の気

持こそ理解すべきであり、障害を通してこそ人の気持が分る様になった自己が、現実水準と理想水準とにおいてよく統合されて知覚されていると思われる。

第1表 現実・理想・過去分類の相関(J)

	過去	現実	理想
過去			
現実	-.202		
理想	-.397	.662	

第2表 代表項目の一致傾向

	ぴったりする		ぴったりしない				
現実—理想	13	45	10	44	58	51	61
現実—過去	/		10	51			
理想—過去	/		10	51			

(数字は項目番号)

なお、前回の報告に含まれた他の聴覚障害者と各分類毎にrを算出して比較してみると、第3表の如く、高い相関は認められない傾向にあった。

第3表 過去・現実・理想分類におけるJさんと他とのrの比較

障害者	過去	現実	理想	性別	年齢
A	337	128	- 026	男	38
B	- 128	080	099	女	25
C	417	474	486	男	41
D	120	337	365	男	28
E	- 281	386	522	女	23
F	487	162	262	女	30
G	471	388	163	女	28
H	- 199	295	272	女	28
I	228	237	- 166	女	26

結果 (健聴者・Y)

Yさんの仮想的自己及び期待的自己の分類においてそれぞれ代表される項目は、以下のとおりであった。( )内の数字はQ得点を、O内の数字は項目番号を示し、Q得点の意味は前述と同様である。

## 1. 仮想的自己

### ぴったりする項目

- (11) 私が障害者であることは、ひとつの現実である①①
- (10) 私は障害を克服しようと努力している⑥
- (10) 私は家族に自分の障害のために苦勞をかけているのを感じている③④
- (10) 私はたとえ障害があっても、その中で自分のできることをしようと思う③⑦
- (9) 私は自己の障害の中から得たものの大きいことを感じている②④
- (9) 私は障害について家族もまた共に分り合っているのを感じている②⑧
- (9) 私は自分の障害を通して自分自身と戦うことを知った③①
- (9) 私は障害者であっても、人にしてあげられるものをもっている④⑥
- (9) 私は同障害者同士で助け合いたいと思う⑥②

### ぴったりしない項目

- (1) 私は障害者であることが信じられない①④
- (2) 私は自分の耳についてあまり意識したことはない①⑥
- (2) 私は自分の障害に感謝している①⑧
- (2) 私は自分の障害を自らよこんで背負いたい④⑧
- (3) 私は自分が障害をもっているかいないかは、どうでもよいことにしか思われない⑦
- (3) 私は自分が障害者であることがはずかしい⑩
- (3) 私は家族から自分の障害について理解されていないのを感じている①⑤
- (3) 私は自分の障害について割り切っている②⑤
- (3) 私はできるだけ自分の障害を他人には隠しておきたい②⑦

自己の障害を現実として承認し、克服に向けて努力しつつ、障害の中での可能性を信じている。また、家族や同障害者に対しては、相互の援助と理解の関係を大事にする自己であり、その期待が見受けられる。Jさんの現実的自己に比べると、まだ十分に障害を超越しきれていないで、障害及び障害者としての現実認識に留まっているともいえるのは、やは

り実際に聴覚障害をもたず、体験的学習や実感に乏しいことに関連すると思われる。Jさんの現実的自己と共通した項目番号は、ぴったりする項目では①①と③①、ぴったりしない項目では⑩のみであった。

## 2. 期待的自己

### ぴったりする項目

- (11) 私は障害を克服しようと努力している⑥
- (10) 私は自分の障害を通して自分自身と戦うことを知った③①
- (10) 私は障害そのものが私に生きがいを与えてくれたのを感じている④①
- (10) 私は障害を通してすべての人々を愛することを知った⑥⑨
- (9) 私は“自分の障害故に……”といったこだわりの気持をもったことがない②⑩
- (9) 私は社会に自分たちの障害を理解してもらうために行動しようと思う②⑨
- (9) 私はたとえ障害があっても、その中で自分のできることをしようと思う③⑦
- (9) 私は障害者である前に、ひとりの人間であることを感じている⑤⑩
- (9) 私は障害を通して、人の心はすべて尊厳に満ちているのを感じている⑤⑤

### ぴったりしない項目

- (1) 私は自分が障害者であることがはずかしい⑩
- (2) 私は家族から自分の障害について理解されていないのを感じている①⑤
- (2) 聞えにくいことは、私をみじめにさせる③③
- (2) 聞えないのなら死んだ方がまだと時々思う⑥⑤
- (3) 私は耳に障害があることでショックを受けている③
- (3) 私は他人の同情や憐れみに腹が立つ②②
- (3) 私は健聴者が羨ましい②③
- (3) 私はうまくいかないことを耳のせいに行っているのを感じている②⑥
- (3) 私はきこえにくいことが自分を不安定にさせていると感ずる③③

Yさんの期待的自己は、障害を克服しよう

と戦い、こだわりよりも生きがいをもち、尊厳に充ちたひとり人間として目ざめ、情緒的に安定した社会人として、積極的に社会的活動に参加できる自己である。Yさんの期待的自己と仮想的自己との対比は、非現実的とはいえず、Jさんの現実的—理想的自己の関係に対応すると思われる。Yさんの期待的と仮想的自己とにおいて一致する代表項目は、ぴったりする項目では⑥、③⑦、③①、また、ぴったりしない項目としては、⑩と⑮であった。仮想的障害者としてのYさんの現実と理想の自己概念は、障害を抱えながら自分のできることをやることによって、障害を克服し、自己自身とも戦うことのできる自己として、矛盾することなく現象の場に共存しているといえる。

Jさんの理想的自己と一致がみられたものは、ぴったりする項目において④①、⑤⑨、⑤⑤、また、ぴったりしない項目では⑩のみであった。それは、生きがい・全人愛・心の尊厳に期待の寄せられた自己であった。

#### 各分類の関係

Yさんの仮想的—一期待的自己の相関は、.38で低かった。

Jさんとの各分類の相関については、第4表の如き結果を得た。

第4表 YさんとJさんの相関

		J		
		過去	現実	理想
Y	仮想期待	.10	.24	.13
	期待	-.30	.45	.52

Jさんの理想的自己に対応すると思われる期待的自己との関係において最もrは高く、かなりの相関を得た。理想とか期待の水準は、実質的ではないので、一般化され易く、安定度も高いのではないと思われる。Jさんの現実的自己に対応する仮想的自己との相関は低く、むしろ、現実—一期待間の方が高いのは、この場合Jさんの現実的自己がそれだけYさ

んの期待に沿ったものとして認められよう。

## 考 察

心理治療によって自己概念が変化することは既に一般に認められていることである。ButlerとHaighの研究では、現実的自己分類と理想的自己分類の高い相関は適応を、低い相関は不適応を示し、治療効果によって、知覚された現実—理想の自己概念の不均衡が減少することが検証されている。その人格変化を、Qテクニックにより明らかにした研究として最も有名である。②

Jさんの現実的知覚された自己は、過去から現在に至る間に、理想に向って再構成されたものと考えられる。Jさんの自己知覚領域が、行動を選択する際の重大な要素と仮定すれば、Jさんの現実的行動にも、ここで想起された過去のそれとは違って、何らかの変容がもたらされているものと思われる。Jさんの現実的自己分類と理想的自己分類との間のかなりの相関が、ひとりよがりの、洞察の欠如による結果であるか否かについては、ここから直ちに断定することはできない。しかし前述の様な、大学生活における現実の体験の自発的な自己表明からは、必ずしも洞察の欠如あるいは自己防衛や偽瞞のもたらすものではないことが類推される。

また、Jさんの自己受容は、想起された過去の自己として知覚された自己とは違った自己構造のゲシュタルトに再体制化された現実の自己概念によって、より明確化されているものと思われるのである。

Jさんの現実的自己とYさんの仮想的自己のずれは、現実的聴覚障害の有無によって積重ねられた自己概念の方向と内容の相違、つまり過去の経験の相違に帰せざるを得ない。事実であれ、仮定であれ、障害者としての現実的及び理想的自己との相関において、健聴者のYさんよりも、障害者のJさんの方が高かったことは興味深い、なお方法論として

も今後に残された課題であるかもしれない。

### 引用文献

1. Block, J. : A Comparison of the forced and unforced Q-sorting Procedures, *Educ. Psychol. Measmt.*, 16, 481~493, 1956,
2. Butler, J.M. & Haigh, G.V. : Change in the Relation between Self-concepts and Ideal Concepts Consequent upon Client-centered Counseling, *Psychotherapy and Personality Change*, In Rogers, C.R. & Dymond R.F. (eds) *Psychotherapy and Personality*, p. 55-75, 1954 ; ロージアズ全集, 第13巻, 第4章, 71-78頁, 岩崎学術出版社, 1973
3. Heider, F. & Heider, G.M. : Studies in the Psychology of Deaf, No. 2, *Psychol. Monog.*, 53, 1941
4. O'Neill J.J. : *The Hard of Hearing*, Prentice-Hall Inc., 1964 ; 佃一郎訳 : 聴力障害〈難聴〉, 言語障害基礎シリーズ8, 日本文化科学社, 1968
5. Rogers, C.R. : *A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client Centered Framework*, in Koch, S. (ed.), *Psychology, A Study of Science*, Vol. III, New York., Mc Graw-Hill, 1959., 伊東博編訳, ロージアズ全集第8巻, 5章, 岩崎学術出版社, 1967
6. Strong, D.J. & Feder, D.D. : *Measurement of Self concept : A Critique of the Literature*, *J. Counsel. Psychol.*, 170-178, 1961 ; 伊東博編訳, カウンセリングの過程, カウンセリング論集3, 209-227頁 誠信書房, 1964
7. 高柳信子 : Q技法による聴覚障害意識の考察 (I), *文教大学人間科学研究*, 第1号, 33-41, 1979
8. 鶴見節子 : 聴覚障害者の障害に対する意識—その人間学的考察, *立正女子大学家政学部児童学科卒業論文*, 1975

本研究に関連して、鶴見節子さんの御協力と御支援に負うところが大きいことを付記して感謝の意を表します。

(1980年9月26日受付)